ひまわりからのメッセージ

145号
2023.12.11
NPOひまわりの花内
西濃圏域
発達障がい支援センター
発行人：中野たみ子

招かれざるお客さま

あっという間に一年が過ぎ去ろうとしています。年令を重ねると時間が過ぎる速さが若い頃とは違ってくると言われますが確かに、一日が、一週間が何と速くに過ぎていくことでしょうか。でも、どういう訳かすでに来年度の予定が次々に入ってくるので、このポンコツ化している頭で本当に大丈夫だろうかと、ふと不安になったりします。

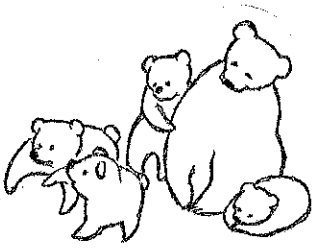
先日、北山に雪が降りました。昔からこの里の言い伝えで北山に三度雪が降ったら次は里に降るとのこと、間もなくかなあ……と思いつつ、そう言えば冬タイヤの交換はまだだったと思い出しました。

何となくぼんやりと移りゆく季節のことを考えていましたら、主人が「南宮の山にくまが出たらしい、登山も禁止らしいよ。」と教えてくれました。日本のあちこちで熊が出没し、被害が報じられています。大学生が襲われて命を落としたという痛ましい報道もありました。田舎に住んでいますから猿や鹿は割に身近に感じて来ましたが、熊となるとちょっと勝手が違います。昔は畑に仔牛がいると思ったのが猪だったということもありましたが、自然界が少しずつ変わってきたということなのでしょう。もちろん、それは私たち人の生活にも影響を及ぼします。

実は、吾が家には夜になると時々招かれざる客が訪ねて来ます。屋根裏でコトッコトッと小さな音をたてるのです。ねずみ君たちのように走り回ってドタバタすることはなく、とっても静かです。けれども確かに生き物が居るのです。私が二階に上がってベットに入り、いざ眠ろうとすると小さな音をたてて、「ねえ、気づいてるの、ここに居るのよ」。とまるでアピールするかのように私が寝つくのを許してくれません。毎年吾が家を訪ねてくる冬の蝶に代わって、一体誰なのでしょう。でも、さすがの私もこのお客さんをいつまでもお泊めするわけにはいきません。何とか穏便にお引き取り願いたいと思っているのですが、あちらさんにもご都合がおありなのでしょう。

庭先では石蕗の花は盛りを過ぎ白の佗助が咲きはじめました。あと二十日もすれば新しい年が訪れます。

「ギフテッド」って知っていますか



先日、ある保育士さんから、「あるお母さんが、うちの子はギフテッドですから、きちんと支援して下さいと言われたのですがギフテッドって何ですか」と質問を受けました。最近よく聞くことばですが、私も十分に分かっているとは言い難く、表現に困りました。

実は、最新のLD学会報のLD研究の中にギフテッドの特集が組まれていましたのでご紹介をしておこうと思いつきました。

ギフテッドは、英語の「才能がある」という形容詞ですが、日本の教育界では名詞として用いられ、「高い知的能力を持つ配慮や支援が必要である子ども」と考えられています。一方「知的能力が高い発達障害」と考える人もあるようです。

片桐正敏(北海道大学)は、発達障害とギフテッドは分けて考えるべきだと言います。たとえギフテッドの特性と発達障害の特性が同じ行動として表れたとしても支援ニーズが異なるために、発達障害に用いられる支援アプローチではうまくいかないというのです。しかし一方でギフテッドと発達障害の両方を持ち合わせている子どもも少なからず存在します。その子たちは2E(二重に特別な支援を必要とする)と考えられています。筆者がギフテッドと発達障害を分けて考えると言う意味はどちらの可能性も排除せず、どちらか一方しかないと思い込まないことだということのようです。

ギフテッドは診断名ではなく、世界共通の定義は存在しませんがアメリカの教育現場では州ごとに独自の認定規準を設けて支援をしているということです。ギフテッドの認定規準となるのは、二〇〇一年に制定された「落ちこぼれ防止法」で、この法律の中ではギフテッドを「知的、創造的、芸術的、リーダーシップなどの分野、または特定の学問分野において高い能力を示し、その能力を十分に伸ばすために、学校では通常提供されないサービスや活動を必要とする者」と定義されています。

しかし、知的能力の基準は法律に規定されていないためにIQ120以上としている州もあればIQ130以上の州もあるとのことですし、支援についての義務づけはなされておらず、州の財政の問題もあって一定ではないとのことでした。

佐賀大学の日高茂暢は、ギフテッドの特性として次の三つを挙げています。

①優れた能力 ②三つの要因 ③過度激動ということです。

①は分かります。②は遺伝的要因、環境的要因と、三つ目の要因として「自分はこうなりたい」「これを表現したい」というような内的動機づけ（自律性）の強さをあげています。そして③の過度激動とは過度な感情や行動があるということです。

ADHDのないギフテッドの子どもであっても多動が認められることもあり、ADHDとの識別は難しいと言えます。しかもギフテッドの子は授業中などにボーッとしていることもあってADHDの注意力の弱さととらえられてしまうこともあるといいます。片桐は、ギフテッドが想像に耽っている状態は、「想像性過度激動」であって、ADHDの過集中とは異なると考えています。彼は、ADHDの過集中はテレビゲームなど刺激自体が魅力的で注意を惹きつけるものに対して起こりやすいが、ギフテッドの場合は自分の好きな事物や探求心といったものから起きる内発的動機から過集中に至る場合が多いと言うのです。テレビゲームなどは刺激が次から次へと入れ替わり、強く注意を引きつける顕著性が高く、能動的に注意を維持しているわけではないわけです。

機能としての集中力には三つの注意のコントロール能力が必要です。つまり、①所定の対象に「注意」を向け続ける能力、②別の対象に「注意」を向け変える能力、③元の所定の対象に「注意」を向け戻す能力で、集中力というのは、この機能の切り替えが重要なのです。

ギフテッドで見られる過集中は、ADHDのそれとはメカニズムが異なる可能性があるにもかかわらず、見た目上は何かしらのADHDの行動特性を示すために、ADHDの診断を受けやすいこともあり、又、知的能力が高い故にADHDが見過ごされることもあると言います。

さて、片桐はASD（自閉スペクトラム症）とギフテッドについても記述しています。「ギフテッドの子どもは早熟で高い言語能力や感覚過敏、強い好奇心などASDの子どもと非常に類似した行動を示すことがある。ASDの人には発達障害の特性を巧妙に隠すマスキングやカモフラージュといった現象が認められることは知られている。ASDのカモフラージュは友人関係や社会的つながり、受容の促進の欲求によって駆動しているとされ、燃えつきや抑うつ、不安、恐れなどを招くことがある。（中略）ギフテッドの子どもは他者への期待に最大限応えようとするが実際に結果が出て周囲の賞賛が続くとは限らず、完璧主義や自分の能力と他者の能力との違い（自分はできるのに他者はできない）他者との意見の相違、強い承認要求などに苦しめられることがある」

知的能力が高い子どもは、不安や抑うつが高いという研究も

報告されているようで不安のほかにも自己批判、感覚過敏動揺しやすい、イライラしやすいなど気分や注意の調整不全のリスクが高く行動障害につながりやすいことも指摘されています。しかし、片桐はギフテッドはその知的能力の高さを生かして、過度激動を制御するための何らかの調整操作をしているのは間違いないと述べているのです。

さて、ギフテッドの診断として重要とされているのはウェクスラー検査です。WISC-Ⅳでは言語理解指標と知覚推理指標、WISC-Ⅴでは言語理解指標と視空間推理指標、流動性推理指標が高く、ワーキングメモリー指標と処理速度指標が低く出ることが多いとのこと、ASDの有無にかかわらずギフテッドでは、この傾向があるようでした。適応機能を評価するヴァインランドⅡ(Vineland-Ⅱ)適応行動尺度では、コミュニケーションと日常生活スキル、社会性の三領域においては、ASDのないギフテッドの子どもの方がASDのある子どもよりも比較的良好な適応能力が示されており、又、IQ130を超える子どもに感覚プロファイルを実施したところ、すべての象限(低登録、感覚探求、感覚過敏、感覚回避)で高いスコアが見られ、感覚の特異性が認められたとのことでした。

テストに関しては、何のことかと思われる方も多いと思いますが「ギフテッドは社会性に関しては社会適応という面で大きな問題はないと言える」と片桐が記している一方、本郷一夫は知的ギフテッド児は、他児と興味関心が異なりコミュニケーションがうまく取れず、学校の授業にも興味が持てず、他児に比べて高い知能をもつが故に不適応状態になることが多いと指摘しています。

ギフテッドに関してはまだまだ分からないことが多く、支援についても現実とかけ離れた自尊感情をもったり、逆に自己肯定感が低いケースもあり、一人ひとりに向き合っていく必要があると思われます。記述したように学者さん達は色々な分析をして理論を展開していかれますが、私たちは目の前の子どもたちと向き合い、その子、その子の将来も見すえながら関わっていかなければなりません。一人ひとりの"困りと強み"を知り、一緒に歩んでいくしかありません。保護者の方々と共に……。

お知らせ

1/15 センター親の会

1/10 ピアサポート

※1月は会場の都合で家族会は休会。

2/14 ピアサポート

2/19 センター親の会

皆さん、どうぞよいお年をお迎えください。